

を感じられる国に行くのが楽しみです」
 「神様に毎日感謝しながら、プロ意識を失わず、舞台上では正直に、長く歌い続けたい」と語る彼は、クラウスすら越えられるかもしれない。 (中 東生)



(ルチア)のエドガルドは、欧州では彼が定番となっているようだ。来日直前にチューリヒで ©中 東生

News 来日直前！注目のテノール、 イスマエル・ジョルディに聞く

アルフレード・クラウスの最後の弟子イスマエル・ジョルディは、欧州でドニゼッティ《ランメルモールのルチア》がかかる度、エドガルド役の候補に挙がる。新国立劇場でも同役を3月14日から26日まで歌うために初来日する直前、チューリヒ歌劇場で同演目再演の際にお話をうかがった。

「クラウス先生は人生最後の3年間を急ぐように、当時の僕にはまだ重かったマントヴァ侯爵まで手ほどきしてくれましたが、先生からは歌唱技術だけでなく、オペラ歌手としての生き方すべてを学びました。エドガルドはレッジャーロからロマンティックに移行する際の最初の役ですが、僕の哀愁を帯びた声に合っていて、現在自分にとって一番重要な役になってきています。2007年にアムステルダムで初めて歌って以来、この役は、ドレスデン、バルセロナ、マドリッド、ミュンヘン、ナポリ、チューリヒ、ベルリン、そして東京、10月にはコヴェントガーデンと、多くの扉を開けてくれました。僕の解釈では、エドガルドは愛よりも自己実現を選び、失って初めてかけがえのない愛に気付くのです。僕のテノール人生も犠牲を強いられます。スペイン人の僕にとってそれは家族ですが、日本でも家族を大切にする伝統が受け継がれているようで羨ましく、また芸術に対する敬意